

「弁邪正説」訓註（下）

廣 田 宗 玄

前回紙幅の關係上掲載しきれなかつた「辨邪正説」後半の訓註を載せる。大慧が具体的に様々な禅風について批評を加える部分である。なお、前回は底本に宋版を使用し、対校を続蔵経本のみで行つたが、より正確を期するため他の「弁邪正説」を載せる、開元寺版『大慧語録』増補分の普説中のもの、ならびに『指月録』所収のものとの対校も加える。前回は末尾に載せることにする。

雲菴和尚頌云、資糧更不著些些、岐路年深恐轉賒。直下  
痛施三頓棒、夜來依舊宿蘆花。又頌臨濟悟旨云、便言黃  
蘗無多法。大丈夫兒豈自乖。脇下兩拳明有信、不從黃蘗  
付將來。又端和尚頌云、一拳拳倒黃鶴樓、一踢踢翻鸚鵡  
洲。有意氣時添意氣、不風流處也風流。據遮兩箇老漢頌、  
便可承嗣臨濟作佗兒孫。真不忝竊。古來幸有恁麼躡格。

如何略、不著些眼腦、看是箇甚麼道理。此事如青天白日、  
有甚麼遮障。諸方有奇特差別。海蠡兒禪、曲曲折折。此  
語又是討佗那語、又是識破遮語、又是不上佗鉤線、不入  
佗圈纜。遮語又是偏正回互。遮語又是尊堂有諱。不敢當  
頭。

\*續||續(統)(指)。\*當||擡(指)

雲菴和尚の頌に云く「資糧更に些些を著い、岐路年深く、恐くは轉た除ならん。直下に三頓の棒を痛施せられ、夜來舊に依つて蘆花に宿す」。

又臨濟の悟旨を頌して云く「便い黄蘗に多法無しと言うも、大丈夫兒、豈に自ら乖かんや。脇下の兩拳、明らかに信有り、黄蘗より付し將ち來たらず」。

又端和尚の頌に云く、「一拳に拳倒す黄鶴樓、一踢に踢翻す鸚鵡洲。意氣有る時に意氣を添え、風流ならざる處也た風流」。

遮の兩箇の老漢の頌に據らば、便ち臨濟に承嗣して佗の兒孫と作るべし。眞に忝竊ならず。古來幸いに慙麼の躰格有り。如何んが略く些の眼腦を著けず。是れ箇の甚麼の道理なるを看ざる。此の事は青天白日の如く、甚麼の遮障か有らん。諸方に奇特の差別有り。海蠡兒禪は曲曲折折なり。此の語又是れ佗の那語を討め、又是れ遮の語を識破し、又是れ佗の鉤線に上らず、佗の圏續に入らず。遮の語は又是れ偏正回互。遮の語は又是れ尊堂に諱有りて、敢えて當頭せず。

○雲庵和尚頌云資糧更不著些些岐路年深恐軛除直下痛施三頓棒夜來依旧宿芦花古尊宿語録卷四五統藏經一八一七五〇下。雲菴和尚は眞淨克文二〇二五一一〇二のこと。臨濟宗黃龍派。黃龍慧南の法嗣。

○頌臨濟悟旨云便言黃蘗無多法大丈夫兒豈自乖助下兩拳明有信不從黃蘗付將來同右。

○端和尚頌云一拳拳倒黃鶴樓一踢踢翻鸚鵡洲有意氣時添意氣不風流也風流白雲守端廣錄統藏經二〇一四三六下。端和尚は白雲守端二〇二五一一〇七二のこと。臨濟宗楊岐派。楊岐方会の法嗣。

○眞不忝窃分に過ぎたことではない。当然そうである。○海蠡兒禪、曲曲折折海蠡（かいれい）とは、ホラ貝のこと。ここでは、あちこちで学んだことだけに頼つて、自己の見解を持たない禪者のことをいう。「曲曲折折」とは、複雑なさま。込み入ること。真理は本来明白なものであるのに、他人の言葉に頼り過ぎて、却つて複雑にしてしまつてゐるという意味。

○是不上佗鉤線不入佗圏續宗師家の指導に従わないこと。○偏正回互洞上五位説に見られる思想で、「偏」は差別現象。「正」は眞如。これらが相即しながらも、それぞれが独立していること。

又有一種、以楞嚴、宗鏡、龍濟偈語所説、眼見耳聞。無非是心、更非別法。引通玄峯頂不是人間、心外無法、滿目青山之類為證、謂之根脚下事、謂之基趾、謂之綿密地。你不妨會得好。若恁麼會、豈不是認物為心。既是你心。又要認他作麼。

\*根脚下||脚跟下(指)。\*趾||趾(普)。

又一種有り、楞嚴、宗鏡、龍濟偈語の所説の「眼に見、耳に聞くこと、是れ心に非ざる無く、更に別法に非ざる」を以つて。「通玄峯の頂是れ人間」「心外無法、滿目青山」の類を引いて證と為し、これを根脚下の事と謂い、これを基趾と謂い、これを綿密地と謂う。你會得して妨げずんば好し。若し恁麼に會すれば、豈に是れ物を認めて心と為すにあらず。既に是れあなたが心ならば、又他を認めんと要して作麼せん。

○楞嚴、宗鏡、龍濟偈語所説、眼見耳聞。無非是心、更非別法||『首楞嚴經』並びに『宗鏡録』に見られる仏と阿難による心に関する問答による(大正藏一九一—一〇七b、

四八一—八七五c)。なお龍濟偈語は現存していないために確認できない。龍濟紹修(生没年不詳)は青原下、羅漢桂琛の法嗣。『伝燈録』卷二四によれば、龍濟は、六〇首余りの偈頌、諸々の銘や論、群經要略などを著したという(大正藏五一—四〇一a)。

○通玄峯頂不是人間心外無法滿目青山||碧巖録第七則評唱にある言葉。「通玄峯」とは、天台山にある峰。自らが達した玄奥の悟境に喩える。

○心外無法、滿目青山||三界唯心。全ては心の現れに他ならず、仏法は目前に現前しているということ。

○根脚下事||足下の重大事。自己がよつてたつ根本の基盤。

○基趾||「根脚下事」と同じ。基盤。

○綿密地||仏法が間断なく自己と親授しているようす。このような宗風をもち、回互傍提を尊び、棒喝を行じないのは曹洞の禅風。

又有一種、將臨濟三玄、雲門三句、逐句解説、以傳燈、廣燈祖師言句各分門類。以一塵纒起、大地全収、一毛頭師子、百億毛頭師子現、盡大地是箇解脫門、盡大地是沙門一隻眼、若人識得心、大地無寸土、山河大地、明暗色空、咸是妙明真心中物之類、配為鉢中玄、函蓋乾坤句。

以三脚驢子弄蹄行、鋸解秤椎\*、火裏蜘蛛、吞大虫、文殊起佛見法見、貶向二鐵圍山、東山水上行、北斗裏藏身、凡語言注解不得處、便道蚊子上鐵牛、無你下嘴處\*、如此之類、謂之句中玄、截斷衆流句。如踏著秤椎硬似鐵、踏破草鞋赤脚走、飢來喫飯、困來打眠、山是山、水是水、行但行、坐但坐、大盡三十日、小盡二十九、如此之類、謂之玄中玄、隨波逐浪句。豈不見、汾陽和尚頌云、三玄三要事難分、得意忘言道易親。一句明明該萬象、重陽九日菊花新。此老子明明為你指出臨濟骨髓。却來逐句、下解注謂、三玄三要事難分、是惣頌\*。得意忘言道易親、是鉢中玄。一句明明該萬象。是句中玄。重陽九日菊花新、是玄中玄。此是前輩中、負大名望、有真實悟處、而大法不明、無師承、杜撰如此。瞎衆生眼、其餘裨販之流、不在言也。想汾陽老人、未肯點頭在。分明向你道、三玄三要事難分、得意忘言道易親。一句明明該萬象、重陽九日菊花新。怎麼道了、更將鉢盂安柄。莫道你負大名、具大辯才、有大智慧。便是達磨大師出來、作這般去就、政好捉來活埋、免致教壞人家男女、一盲引衆盲。問著三要却注解不得。便將同德山托鉢、巖頭末後句、南泉斬猫兒、

百丈野狐話、歸宗斬蛇、大隋燒畚、趙州勸婆勘菴主、睦州擔板、陳操尚書勘僧、玄沙敢保老兄未徹在、洞山道即太煞、只道得八成、達磨隻履西歸、如此之類、皆謂之末後句。便引洛浦云、末後一句、始到牢関。把断要津、不通凡聖。任從天下樂欣欣、我獨不肯。謂之我為法王於法自在。任你學者逞盡神通、呈盡伎倆、我只一向把住、不許你謂之牢関。直待舉立僧住院、密室口耳傳授、如斯之類、自毀正因、返行魔説。

\*暗||闇(普)。\*椎||錐(指)。\*嘴||嘴(指)。\*なし||將(統)。\*惣||總(統)(指)。\*政||正(指)。\*話||なし(統)(指)。\*勘婆||勘婆子(普)。

又一種有り、臨濟の三玄、雲門の三句を將つて、句を逐つて解説し、傳燈、廣燈の祖師の言句を以て各おの門類を分かつ。「一塵纔かに起これば、大地全て収まる。一毛頭に百億師子、毛頭の師子現ず」、「盡大地是れ箇の解脱の門、盡大地は是れ沙門の一隻眼」、「若し人、心を識得せば、大地寸土無し」、「山河大地、明暗色空、咸く是れ妙明真心中の物」の類を以て、配して

躰中玄、函蓋乾坤の句と為す。「三脚の驢子、蹄を弄して行く」、「鋸、秤椎を解く」、「火裏の蜘蛛、大虫を呑む」、「文殊佛見法見を起こし、二鐵團山に貶向さる」、「東山水上を行く」、「北斗裏に身を藏す」凡そ語言注解し得ざる處は、便ち「蚊子鐵牛に上る、你的嘴を下す處無し」と道う。此くの如きの類を以て、これを句中玄、截斷衆流の句と謂う。如<sup>たと</sup>えば「秤椎を踏著せば、硬きこと鐵に似たり」、「草鞋を踏破し、赤脚にして走る」、「飢え來れば飯を喫し、困じ來れば眠を打す」、「山は是れ山、水は是れ水」、「行は但だ行、坐は但だ坐」、「大盡三十日、小盡二十九」、此の如きの類、これを玄中玄、随波逐浪の句と謂う。

豈に見ずや、汾陽和尚の頌に云く、「三玄三要、事分ち難し。意を得て言を忘ずれば、道親しみ易し。一句明明として萬象を該ぬ。重陽九日菊花新なり」。此の老子、明明に你が為に臨濟の骨髓を指し出す。却り來つて句を逐い解注を下して謂う、「三玄三要の事分ち難し」とは、是れ總頌なり。「意を得て言を忘ずれば道親しみ易し」とは、是れ躰中の玄。「一句明明として萬象

を該ぬ」とは、是れ句中の玄。「重陽九日、菊花新なり」とは、是れ玄中の玄。此れは是れ前輩の中に大名望を負い、眞實の悟處有るに、大法明らめず、師承無し。

杜撰なること此の如し。衆生の眼を瞎まし、其餘の裨販の流は言うに在らず。想うに汾陽老人、未だ點頭するを肯わざらん。分明に你に向かつて道わん、「三玄三要の事分ち難し、意を得て言を忘ずれば、道親しみ易し。一句明明として萬象を該ぬ、重陽九日菊花新なり」と。恁麼に道了つて、更に鉢盂を將て柄を安かんとす。道うこと莫れ、你大名を負い、大辯才を具して、大智慧有りと。便<sup>た</sup>是<sup>と</sup>い達磨大師出で來つて這般の去就を作すも、政に好し、捉え來つて活埋し、人家の男女を教壞して、一言の衆盲を引くを致すを免れんには。三要を問著さるも、却つて注解し得ずして、便ち「徳山の托鉢、巖頭末後の句」、「南泉の斬猫兒」、「百丈野狐の話」、「歸宗の斬蛇」、「大隋の燒畚」、「趙州の勘婆子勘菴主」、「睦州の擔板」、「陳操尚書の勘僧」、「玄沙の敢えて保す老兄の未徹在」、「洞山道うことは、即ち太煞<sup>たさ</sup>だなるも只だ八成を道い得たり」、「達磨の隻履

西歸」。此くの如くの類を將同つて、皆なこれを末後の句と謂い、便ち洛浦を引いて云う、「末後の一句もて、始めて牢關に到り、要津を把断して、凡聖を通ぜしめず。任従い天下樂しむこと欣欣たるも、我獨り肯わらず」。これを我法王と為つて法において自在なりと謂う。任従い學者の神通を逞盡し、伎倆を呈盡するとも、我只だ一向に把住して、你的これを牢關と謂うを許さじ。直い立僧を擧げて院に住せしめ、密室に口耳して傳授するに待るも、斯くの如きの類は、自ら正因を毀し、返つて魔説を行す。

○臨濟三玄臨濟の三玄三要のこと。臨濟自身はこれについて直接には言及していない。三玄は一般に①体中玄、②句中玄、③玄中玄の三つをいう。しかし、このような分類は後の時代になってから現れたようである。臨濟によれば、三玄と三要は共に連関しているものとする。一句語須具三玄門。一玄門須具三要。有權有用。汝等諸人作麼生会」(『臨濟録』上堂 大正藏卷四七—四九七a)。  
○雲門三句雲門宗の三句の意で、徳山縁密が師の雲門の接化の手段を三句にまとめたもの。函蓋乾坤、目機鉗両、

不涉万縁の三つをいう。これに対し、徳山自身が雲門三句を、別に三句にまとめ、函蓋乾坤、截断衆流、随波逐浪の句としてしている。この示衆では、後者の三句をとつて

〇一塵纔起、大地全収、一毛頭師子、百億毛頭師子現天聖広燈録』卷一八石霜楚円章には「一塵纔舉、大地全収。一毛頭師子、百億毛頭現、百億毛頭師子」とある。石霜楚円(九八六一—一〇三九)は臨濟宗楊岐派。汾陽善昭の法嗣。しかし、本来は『雲門広録』卷中において、洛浦元安の言葉として載る言葉である。「洛浦和尚云、一塵纔起大地全収。一毛頭師子全身纔是爾」(大正藏四七—五四七a)。一微塵の内に大地全てが収まっているという意味。洛浦元安(八三四—八九八)は青原下。夾山善会の法嗣。  
○尽大地是箇解脱門、尽大地是沙門一隻眼前半は『景德伝燈録』卷一九安国弘瑠章に、「尽乾坤是箇解脱門。把手教伊入不肯入」という語がある(大正藏五一—三五三c)。安国弘瑠(生没年不詳)は雪峯下。雪峰義存の法嗣。後半の「尽大地是沙門一隻眼」は、『伝燈録』卷一〇長沙景岑章に「尽十方世界是沙門眼。尽十方世界是沙門全身。尽十方世界是自己光明」とある(大正藏五一—二七四a)。大地のそのままがすでに解脱に導く門戸であり、大地ごとごとく自己と異なるはないのだという意味。長沙景岑

(生没年不詳)は南岳下。南泉普願の法嗣。

○若人識得心、大地無寸土Ⅱ『広燈録』卷一八翰林學士楊億章(統藏經一三五―七七九下)。学人が本心に心を自覚すれば、万物が心ならざるはないことをいう。翰林學士楊億(九七四―一〇二〇)は臨濟宗、廣慧元璉の法嗣。

○山河大地、明暗色空、咸是妙明真心中物Ⅱ『山河大地、明暗色空』は、『伝燈録』卷一八玄沙師備章に「如今現前見有山河大地、色空明暗種種諸物。」とある(大正藏五一―三四四b)。「咸是妙明真心中物」は、『伝燈録』卷二一國泰瑠章に「上堂曰。不離当处。咸是妙明真心」とある(大正藏五一―三三三a)。玄沙師備(八三五―九〇八)は青原下。雪峰義存の法嗣。國泰瑠(生没年不詳)は青原下。玄沙師備の法嗣。

○以三脚驢子弄蹄行Ⅱ『伝燈録』『広燈録』共にみられない語であるが、『楊岐方会語録』等、宋代ではよく使われた表現である。

○鋸解秤錘Ⅱ『広燈録』卷一七大愚守芝章に「鋸解秤錘」として見られる(統藏經一三五―七六二上)。ノコギリで秤の分銅を切り分けること。全く齒がたためことの喩え。大愚守芝(生没年不詳)は臨濟宗。汾陽善昭の法嗣。

○火裡蜘蛛吞大虫Ⅱ『伝燈録』には、卷一九雲門文偃章に「火裏蜘蛛吞大蟲」(大正藏五一―三五八c)として見られる。

しかし、『雲門廣録』卷上には、「火裏蜘蛛吞大蟲」(大正藏四七一―五四九b)と出ている。「蜘蛛」の正確な意味は不明であるが、空を飛ぶ小さな虫のことであろう。

○文殊起仏見法見見向二鉄囲山Ⅱ全く同じ表現は見られないが、『広燈録』卷九百丈懷海章に「得菩提等法者似、手觸火。文殊云若、起佛見法見應、當害已」とある(統藏經一三五―六七七下)。これは本来『諸仏要集經』に見られる話である。文殊が自ら衆生界に留まっていることに對して慢心を生じた為に、天王仏が文殊を鉄の山へ追放したという話による。百丈懷海(七四九―八一四)は南岳下。馬祖道一の法嗣。

○東山水上行Ⅱ『雲門広録』卷中に見られる。本分の機語。「問如何是諸仏出身处。師云。東山水上行」(大正藏四七一―五四五c)。

○北斗裡藏身Ⅱ『北斗藏身』では、『広燈録』卷一九長樂政章(統藏經一三五―七八三上)等に見られるが、これは本来は『雲門広録』卷上に見られる言葉。北斗はあらゆる星座の統括者であり、そこにかくれるということとは、全宇宙の中心の位置に昇ってひっそりとおさまることをいう(大正藏四七一―五四六a)。

○蚊子上鉄牛無你下嘴处Ⅱ『伝燈録』卷九瀉山靈祐章(大正藏五一―二六五b)。蚊の嘴では鉄の牛の血を吸おうとし

ても嘴を刺すことはできない。全く取り付くしまのないことへの喩え。鴻山靈祐(七七一一八五三)は南岳下。百丈懷海の法嗣。

○截断衆流句||あらゆる知見を断ち切る句。

○踏著秤椎硬似鉄||『広燈録』卷一七谷隱蘊聰章(統藏経一三五―七五四上)。秤に使う分銅を踏みつけて、その堅さに驚く。全く鉄の固さには手のつけようがない。話頭のことであるか。谷隱蘊聰(九六五―一〇三二)は臨済宗。首山省念の法嗣。

○踏破草鞋赤脚走||『広燈録』卷二二崇勝光祚章(同右八一八頁下)。永年の修行によって草鞋を踏み破り、裸足で歩き去る。全てが脱落して、もはや身につけるものは何も無いという意味。智門光祚(生没年不詳)は雲門宗。香林澄遠の法嗣。

○飢来喫飯困来打眠||元来「南嶽懶瓊和尚歌」にある「飢来喫飯、困来即眠」の二句からきた言葉。(大正蔵五一―四六一b)。南嶽明瓊(生没年不詳)は神秀の弟子、嵩山普寂の法嗣。全く自在な自受用三昧のこと。

○山是山水是水||黄檗の『宛陵録』に見られる言葉。(大正蔵四八―三八五c)。なお『曹山録』「五位旨訣」、「碧巖録」にも見られる。

○行但行坐但坐||『雲門広録』に、「行但行坐但坐。総不得

動著」とある(大正蔵四七一五五五c)。なお『大慧語録』に次のような言葉が見られる。「雲門一日拈拄杖云、凡夫実謂之有、二乗析謂之無、縁覚謂之幻有。菩薩当體即空。衲僧見拄杖但喚作拄杖。行但行坐但坐。総不得動著」(大正蔵四七一八三七c)。

○大尽三十日小尽二十九||『広燈録』卷二二乾明普章(統藏経一三五―八二二上)にあり。誰もが知っている日常のきまりをいう表現。当たり前のことだ。

○汾陽和尚頌云三玄三要事難分得意忘言道易親一句明明該万象重陽九日菊花新||『汾陽無德禪師語録』にあり(大正蔵四七一五九七b)。なお汾陽善昭(九四七一―一〇二四)自身は、臨済の法を嗣いだ禅者であることは言うまでもないが、その思想は曹洞の宗旨に対して近似したものであった。例えば、『仏祖歴代通載』卷一八の「尤喜論曹洞、石門徹禪師者、蓋其派之魁奇者、昭作五位偈、示之曰、五位參尋切要知、纖毫纒動即差違、金剛透匪誰能曉、唯有那吒第一機、舉目便令三界靜、振鈴還使九天歸、正中妙挾通回互。擬議鋒鋷失却威。徹拊掌稱善。然終疑臨濟兒孫别有奇處」(大正蔵四九一六六二a)とあることからもわかる。

○鉢孟安柄||鉢孟等の食器に把手をつける。余計なこと。いらぬことの意味。

○達磨大師「一言引衆盲」たとえ達磨大師が出てきて、このような丁寧な解説をしたとしても、人々を迷わせるだけだということ。

又有一種道、南泉斬猫兒、百丈野狐、歸宗斬蛇、大隋燒畚、趙州勘婆子勘菴主之類、謂之建立門庭。本無恁麼事、貴要羅籠學者。

又一種有つて道く、「南泉の斬猫兒」、「百丈の野狐」、「歸宗の斬蛇」、「大隋の燒畚」、「趙州の勘婆子勘菴主」の類、これを建立門庭と謂う。本と恁麼の事無きに、學者を羅籠せんと貴要す。

○徳山托鉢巖頭末後句二「伝燈録」、「広燈録」共に見られない。しかし大慧の『正法眼蔵』には次の様に採用されている。

「徳山和尚一日飯遲、先托鉢下堂。雪峰時作飯頭、纔見便問、遮老漢鐘未鳴、鼓未響、托鉢向甚麼處去。山便掃方丈。雪峰舉似巖頭。頭云、大小徳山不会末後句。山聞舉、令侍者喚巖頭來問。汝不肯老僧那。巖頭密啓其意。山來日上堂与尋常説話不同。頭向堂前撫掌大笑云、且喜堂頭

老漢会末後句。佗後天下人奈何。雖然如是、只得三年後。三年果遷化」(統蔵經一八八—五二上)。徳山宣鑑(七八〇—八六五)は青原下。龍潭崇信の法嗣。巖頭全豁(八二八—八八七)は青原下。徳山宣鑑の法嗣。

○南泉斬猫兒二「伝燈録」、「碧巖録」六三則、「正法眼蔵」、「無門関」一四則等に見られる。「師因東西両堂各爭猫兒。師遇之、白衆曰、道得即救取猫兒。道不得即斬却也。衆無对。師便斬之。趙州自外歸。師举前語示之、趙州乃脱履、安頭上而出。師曰、汝適來若在、即救得猫兒也」(「伝燈録」南泉章 大正蔵五一—二五八a)。南泉普願(七四八—八三四)は南岳下。馬祖道一の法嗣。

○百丈野狐二「百丈語録」に見られる話頭。「正法眼蔵」、「無門関」二則等に見られる。「百丈和尚凡參次有一老人、常随衆聽法。衆退老人亦退。忽一日不退。丈遂問、面前立者復是何人。老人云、某甲非人也。於過去迦葉仏時曾住此山。因学人問、大修行底人還落因果也無。云、不落因果。後五百生墮野狐身。今請代一転語。遂問云、大修行底人還落因果也無。云、不昧因果。老人於言下大悟、作礼云、某甲已脱野狐身、住在山後、乞依亡僧事例。丈令維那白衆云、食後送亡僧。食後丈領衆至山後。巖下以杖挑出一死野狐、乃依法火葬。丈至晚上堂舉前因縁。黄檗便問、古人錯对一転語墮五百生野狐身。転転不錯、合作

簡甚麼。丈云、近前來与汝道。槃遂近前与丈一掌。丈拍手笑云、將謂胡鬚赤、更有赤鬚胡」（『正法眼藏』 統藏經一一八一—一四二b）。なお『正法眼藏』には、この後に瀉山靈祐の因縁を載せる。

○ 帰宗斬蛇 II 『伝燈録』 帰宗智常章、『正法眼藏』、『五灯会元』等に見られる。しかし、それぞれかなり内容の異なったものである。ここではその比較はしないが、大慧が挙げる因縁として、自身が編集した『正法眼藏』からの話頭を引用する。「帰宗和尚刻草次。有講僧来参。忽有一蛇過、宗以鋤断之。僧云、久響帰宗、元来是箇羅行沙門。宗按鋤顧視僧曰、你羅我羅。後來雪峰問徳山、古人斬蛇意旨如何。徳山便打。雪峰便走。徳山召云、布衲。雪峰回首。徳山云、佗後悟去方知老漢徹底老婆心」（統藏經一一八一—一四下）。帰宗智常（生没年不詳）は南岳下。馬祖道一の法嗣。

○ 大隋焼除 II 『古尊宿語録』 卷三五「大隋神照禪師語要」に見られる。「師因焼山次見一蛇、以杖挑向火中。咄。云、這箇形骸、猶自不放捨、你向這裏死、如暗得燈。遂有僧問、正當怎麼時還有罪也無。師云、石虎叫時山谷響、木人吼處鐵牛驚」（統藏經一一八一—六一三上）。大隨法真（八三四—九九一）は、南岳下。偽山靈祐の法嗣。

○ 趙州勘婆子勘庵主 II 「趙州勘婆子」の公案は、『伝燈録』

卷一〇趙州章、『正法眼藏』、『無門関』三一則、「趙州録」等に見られる。「有僧遊五臺、問一婆子云、臺山路向什麼処去。婆子云、暮直怎麼去。僧便去。婆子云、又怎麼去也。其僧学似師。師云、待我去、勘破這婆子。師至明日、便去問。臺山路向什麼処去。婆子云、暮直去。師便去。婆子云、又怎麼去也。師帰院謂僧云、我為汝勘破這婆子了也」（『伝燈録』 大正藏五一—二七七b）。

「趙州勘庵主」は、『正法眼藏』、『趙州録』、『無門関』一則、等に見られる。「師行脚時到一尊宿院、纔入門相見。便云、有麼有麼。尊宿豎起拳頭。師云、水淺船難泊、便出去。又到一院、見尊宿便云、有麼有麼。尊宿豎起拳頭。師云、能縱能奪能取能撮。禮拜便出去」（『古尊宿語録』 趙州章 統藏經一一八一—三三一上）。趙州從諗（七七八一—八九七）は南岳下。南泉普願の法嗣。

○ 睦州担板 II 『伝燈録』 卷一二陳操尚書章等に見られる。「或見講僧。乃召云、座主。其僧応諾。師云、担板漢」（大正藏五一—二九一b）。睦州道明（生没年不詳）は南岳下。黄檗希雲の法嗣。

○ 陳操尚書勘僧 II 『伝燈録』 卷一二陳操尚書章、「睦州刺史陳操与僧齋次、拈起餠餅問僧、江西湖南、還有遮箇麼。僧曰、尚書適来喫什麼。陳曰、敲鐘謝響」（大正藏五一—二九六b）。陳操（生没年不詳）は、睦州道明の法嗣。

○玄沙敢保老兄未徹在<sup>二</sup>『玄沙語録』卷上には次のように見られる。「靈雲到相看了、師乃問、那裏何似者裏。雲云。也只是桑梓。別無他故。師云、在也無。雲云、恒然、恒然。師云、何不道。雲云、三十來年尋劍客。幾回葉落幾抽枝。自從一見桃花後。直至如今更不疑。師云、甚生桑梓之能。雲云、向道故非外物。師云、如是如是。雲云、不敢不敢。師云、諦當甚諦當。敢保未徹在。雲云、是和尚還徹也未。師云須与麼始得。雲云、亘古亘今。師云。甚好、甚好。遂作偈送靈雲、三十來年只如常。幾回落葉放毫光。自從一出雲霄外。円音体性応法王」(統藏經一二六一三五七上)。「伝燈録」卷一一靈雲志勳章には、靈雲の悟道の偈を見た澗山が認めたことを記した後に割注として、玄沙の未徹在の語を入れている。しかし、『大慧武庫』(大正藏四七一九五七a)の記述によれば大慧が、『正法眼蔵』卷中(統藏經一一八一八七下)の記述によれば五祖法演が、それぞれ靈雲の悟道の因縁そのものを疑問視していたことが窺える。

○洞山道即太然只道得八成<sup>二</sup>洞山の言としては記録されていないが、『五灯会元』卷六雲蓋志元章に、石霜慶諸の言として記録されている。また『碧巖録』八九則には、道吾円智(七六九—八三五)の言として記録されている。洞山了价(八〇七—八六九)は青原下。雲巖曇晟の法嗣。

○達磨隻履西帰<sup>二</sup>『伝燈録』卷三菩提達磨章の次の因縁による。「後三歳、魏宋雲奉使西域迴、遇師于葱嶺、見手携隻履翩翩独逝。雲問師、何往。師曰、西天去」(大正藏五一—二二〇b)。

○將同<sup>二</sup>二字で「くをもつて」と読む。このように二字で「將」の一字と同じ意味で使っている同義連文、同義復詞の例として以下の引用をあげる。「格外の学に非ざれども、名句を將以つて擬議する莫れ(非格外之学、莫將以名句擬議矣)(偈頌といつても、韻律を無視したいとなみではないが、しかし言葉で穿鑿してはならない)」「禪門諸祖偈頌」卷一、統藏經一一六一九二一上)。

○洛浦云末後一句始到牢関把断要津不通凡聖任從天下楽欣欣我独不肯<sup>二</sup>ぎりぎり決着の一句を言いとめること。前半のみ『伝燈録』卷一六樂普元安章に見られる(大正藏五一—三三一b)。なお『五灯会元』卷六洛浦元安章にはこの部分の全てが見られる(統藏經一三八—二〇〇上)。洛浦元安については既出。

○我為法王於法自在<sup>二</sup>『法華經』比喻品第三(大正藏九一—五b)。

○密室口耳伝授<sup>二</sup>大慧はその語録中において、さまざまに密室での法の授受を批判している。例えば「方外道友請普説」には、「須是以悟為則。宗師本無實法與人。只作得

箇證明主宰而已。纔言有密室傳授、謂此事莫教別人知。決定是邪魔外道見解」とあり、また「悦禪人請普説」には、「只如世尊在靈山会上、百万衆前拈華普示。独迦葉破顔微笑。何曾怕人知、又何曾密室裏傳授來(大正藏四七一八一―一八八―b)」。とある。また「年譜」二〇歳の項の、大慧が曹洞宗の洞山微禪師に参じ、嗣法をうけるもの、その内容を僧堂前に貼りだしたという因縁からもそのことが窺える。「又為方敷文普説云、微却有悟門、只是不合、將功勲五位・偏正回互・五王子之類、許多家事來傳。被我一伝得了、写作一紙牒、在僧堂前。大丈夫參禪、豈肯就宗師口辺喫野狐涎唾。尽是闍老子」(『大慧年譜』)。

○建立門庭||学人接化のための方便のこと。

○羅籠||羅は鳥のあみ。籠はかごのこと。あみやかごに入られて、身動きならぬさまから、身や心の自由と安らぎを妨げる煩惱や妄想に喩えていう。

又有一種、以偏正回互為宗旨。如洞山與雲居過水次、洞山問、水深多少。云、不濕。山云、麤人。雲居却問、水深多少。云、不乾。謂水諱濕、而當頭道濕、不能回互、謂之麤人。雲居却云不濕。是觸諱而不能回互。洞山道不乾、乃有語中無語。何謂有語。不乾是。何謂無

語。不乾是。不乾乃是濕、是活語。能回互、不觸諱故也。

又一種有り、偏正回互を以て宗旨と為す。例えば洞山、雲居と水を過る次、洞山問う、「水深きこと多少ぞ」。云く、「不濕」。山云く、「麤人」。雲居却つて問う、「水深きこと多少ぞ」。云く、「不乾」。水を謂うは濕を諱とす。當頭に濕と道いて、回互すること能わず。これを麤人と謂う。雲居却つて云く、「不濕」と。是れ諱に觸れて回互すること能わず。洞山の「不乾」と道うは、乃ち有語の中の無語。何をか有語と謂う。「不乾」是れなり。何をか無語と謂う。「不乾」是れなり。「不乾」は乃ち是れ濕。是れ活語なり。能く回互して諱に觸れざるが故なり。

○又有一種、以偏正回互為宗旨、洞山道不乾||『洞山語録』(大正藏四七一五二二a)。「以偏正回互為宗旨」とは曹洞宗のこと。「五位」は曹洞宗の重要な教理であり、偏正五位、功勲五位、君臣五位、王子五位の四つがある。ここ

では初めの二つを大慧は解説している。なおこの大慧の五位に対する解説は、後年黙照禪との關係上非常に重要視されている。概ね曹洞禪者からの批判であるが、曹洞禪との解釈の相違は興味深い。

○何謂有語不乾是<sub>11</sub>底本および統藏經・開元寺版普説・指月録、また洞山録みな「不乾」であるが、文脈から推して「不濕」でなければならぬ。

又以黑白圈兒作五位形相。以全黑圈兒為威音那畔、父母未生、空劫已前、混沌未分事、謂之正位。以二分黑一分白圈兒為正中偏、却來白處說黑底、又不得犯著黑字。犯著黑字、即觸諱矣。更引洞山頌云、正中偏、三更初夜月明前。謂能回互。只言三更、三更黑。初夜是黑。月明前是黑。不言黑、而言三更初夜月明前。是能回互不觸諱。以兩分白一分黑圈兒為偏中正。却來黑處說白底、而不得犯白底。消息云、偏中正、失曉老婆逢古鏡。不言明與白、而言失曉與古鏡、是能回互明與白字而不觸諱。蓋失曉是暗中之明。古鏡亦是暗中之明。老婆頭白、不說白而言老婆、白在其中矣。能回互白字故也。又說正中來頌云、正中來、無中有路隔塵埃。或云、出塵埃。謂凡有言句、皆

無中唱出、便自挾妙了也。無不從正位中來。或明或暗、或至或到、皆妙挾通宗。凡一位皆具此五事、如掌之五指、無少無剩。兼中至謂兼黑兼白、兼偏兼正而至。何謂至。如人歸家、未到而至別業、乃在途為人邊事。亦能回互。妙在躰前。兼中到謂兼前四位、皆挾妙而歸正位。謂之折合歸來炭裏坐。亦是說黑處而回互黑字、不道黑而言炭。

\*已<sub>11</sub>以(指)。

又黑白の圈兒を以て五位の形相を作す。全黑圈兒を以て、威音那畔、父母未生、空劫已前、混沌未分の事と為して、これを正位と謂う。黒を二分し、一分の白圈兒を以て正中偏と為す。却り來つて白處に黒底を説き、又黒字に犯著することを得ず。黒字に犯著せば、即ち諱に觸る。更に洞山の頌を引いて云く、「正中偏、三更初夜月明前」と。能く回互すを謂う。只だ三更と言うのみ。三更は是れ黒。初夜は是れ黒。月明前は是れ黒。黒と言わずして「三更初夜月明前」と言う。是れ能く回互して諱に觸れず。白を兩分し、一分の黒圈兒を以て、偏中正と為す。却り來つて黒處に白底を説

き、白底を犯すことを得ず。消息に云く、「偏中正、失曉の老婆、古鏡に逢う」と。明と白とを言わずして、失曉と古鏡を言う。是れ能く明と白字とを回互して諱に觸れず。蓋し失曉とは是れ暗中の明なり。古鏡も亦た是れ暗中の明なり。老婆は頭白し、白と説かずして老婆と言ひ、白はその中に在り。能く白字と回互するが故なり。

又正中來の頌を説いて云く、「正中來、無中に路有りて塵埃を隔つ」、或いは云く、「塵埃を出づ」と。凡そ言句有るは、皆無の中より唱出し、便たなわ自みづかち妙を挾しほみ了れるを謂う。正位の中より來たらざるは無し。或いは明、或いは暗、或いは至、或いは到、皆妙を挾み宗に通ず。凡そ一位に皆な此の五事を具すこと、掌の五指の如く、少かくること無く、剩ること無し。兼中至は、黒を兼ね、白を兼ね、偏を兼ね、正を兼ね、しこうして至るを謂う。何をか至と謂う。人の家に歸るに、未だ到らずして別業に至るが如し。乃ち途に在つて為人する邊の事なり。亦た能く回互す。妙は躰前に在り。兼中至は、前の四位を兼ね、皆な妙を挾み正位に歸す

るを謂う。これを「折合して歸り來たりて炭裏に坐す」と謂う。亦た是れ黒處を説いて黒字を回互し、黒と道わずして炭と言ふなり。

○又以黑白圈兒作五位形相曹山の五相偈に見られる黑白の図相による(大正藏四七一五二七a)。

○以二分黒一分白圈兒為正中偏不道黒而言炭。『人天眼目』(大正藏四八一三一六c)にも出る。

或者又謂、曹山有言、正位者即空界也。一向無物。偏位者即色界也。内有種種諸雜萬像。兼中至者捨事入理。正中來者背理就事。兼帶者即冥應衆緣、不隨諸有、非染非淨、無正無偏。故云、虛玄要道、無著真宗。從上先德、推此一位、最妙最玄。須是審詳辨明當體。又説、五位皆三字成句。偏正上下回互而不犯中。中即正位也。説理說事、教有明文。教外單傳直指之道、果如是否。若果如是、討甚好曹山邪。

\*像象(普)(指)。\*邪耶(指)。

或いは又謂う、曹山に言う有り。「正位とは即ち空界なり。一向に物無し。偏位とは即ち色界なり。内に種種諸雜の萬像有り。兼中至とは事を捨て理に入る。正中來とは理に背いて事に就く。兼帶とは即ち冥に衆縁に應じて諸有に随わず、染に非ず、淨に非ず、正無く、偏無し。故に虚玄の要道、無著の眞宗と云う。從上の先徳、此の一位を推して、最妙最玄なり。須く是れ審詳に當體を辨明すべし」。

又説く、「五位は、皆三字もて句を成す。偏正は上下回互して中を犯さず。中は即ち正位なり」。理を説き、事を説く。教に明文有り。教外單傳、直指の道は、果たしてかくの如きや。若し果して是の如くならば、甚の好き曹山をか討めんや。

○正位者即空界也。須是審詳辨明當體。『曹山録』には次のように記す。「正位即空界。本來無物。偏位即色界。有萬象形。正中偏者、背理就事。偏中正者、舍事入理。兼帶者、冥應衆縁、不墮諸有、非染、非淨、非正非偏。故曰、虚玄大道、無著眞宗。從上先徳、推此一位、最妙最玄、

當詳審辨明」(大正藏四七—五三六c)。

又引浮山作大陽眞讚曰、黑狗爛銀蹄。自注云、此語正位中有偏位。黑狗是正位。爛銀蹄是偏位。白象崑崙騎。自注云、此語偏位中有正位。於斯二無礙。自注云、此語不隨有無二邊。所以洞山云、不落有無。誰敢和。木馬火中嘶。自注云、妙挾。然雖妙挾而虚玄唱道也。似遮般說話、須教你燒頂煉臂、發誓願不得妄傳、然後分付、亦謂之末後句。

又浮山の作りし大陽の眞讚を引いて曰く、「黑狗、銀蹄を爛かす」。自注して云う、「此の語は正位中に偏位有り。黑狗は是れ正位、爛銀蹄は是れ偏位なり」と。「白象崑崙に騎る」。自注して云う、「此の語は偏位中に正位有り」と。「斯の二に於いて無礙」。自注して云う、「此の語は有無の二邊に墮さず。所以に洞山云く、有無に落ちず、誰か敢えて和せん」と。「木馬火中に嘶く」。自注して云う、「妙挾なり。妙挾なりと然雖も虚玄唱道なり」と。遮般の說話の似きは、須く你をして頂を燒

き、臂を煉り、誓願を發して、妄傳することを得ざらしめ、然る後に分付し、亦たこれを末後の句と謂う。

○浮山二浮山法遠(九九一—一〇六七)。臨濟宗。葉縣歸省の法嗣。浮山は臨濟の嗣法をうけた後、大陽警玄より曹洞の宗旨の密囑を受けて、後に投子義青に代付した。

○大陽二大陽警玄(九四三—一〇二七)のこと。曹洞宗。梁山縁觀の法嗣。すでに葉縣歸省の法を嗣いでいた浮山法遠に衣履と直椽とを与えて後事を託す。

○黒狗爛銀蹄二『禪林僧宝伝』卷一七、浮山章に以下の通りに出る。「又作明安延公贊曰、黒狗爛銀蹄、白象崑崙騎。

於斯二無癡、木馬火中嘶(続藏經一三七—五一—a)。○洞山云不落有無誰敢和二『洞山録』に出る。「兼中到、不落有無誰敢和。人人盡欲出常流、折合還歸炭裏坐」(大正藏四七—五二五c)。

○須教你燒頂煉臂發誓願不得妄傳二本来己れの身を捨てることによつて布施波羅密を実践する捨身供養から来ているのであるが、ここでは、身体の一部を焼くことによつて仏法への信を確認することをいう。当時、嗣法の証明として臂の上で香をたいて、その法を妄りに伝えないことを誓つた。当時の曹洞宗は乱嗣を許さなかつたという。

師舉了、遂彈指云。好掩彩底禪、若是皮下有點血底、還肯喫遮茶飯麼。我且問、你臘月三十日、四大相將解散、平昔記持學得底、還回互得麼。回互時還著意也無。當恁麼時、心識已昏。如何回互。既回互不得、定撞入驢胎馬腹中、隨業受報。當此之時、欲觸諱作僞人、亦不可得。況能敵佗生死邪\*。

\*點二無し(普)。\*之二なし(指)。\*僞二粗(指)。  
\*邪二耶(指)。

師舉了つて、遂に彈指して云く、「好き、掩彩底の禪、若し是れ皮下に點血有る底ならば、還た肯て遮の茶飯を喫せんや。我れ且く問う、你臘月三十日、四大相將つて解散するとき、平昔記持學得する底、還た回互し得るや。回互する時、還た著意するや。恁麼の時に當つて、心識已に昏し。如何んが回互せん。既に回互し得ずんば、定めて驢胎馬腹中に撞入し、業に隨い報を受けん。此の時に當つて、諱に觸れて僞人と作らんと欲するも、亦た得べからず。況んや能く佗の生死に敵せんや」。

○掩彩底禪。他人の威光を減ずるような禪。ここでは大慧はこう言つてこれまでに例としてあげたような禪風をあざ笑つてゐる。

○四大相將解散。四大分離する。つまり死ぬ時のこと。

○撞入驢胎馬腹中。畜生に生まれ変わるという意味。いざ死に臨んだとき、これまで学んだことをどうやって生かすことができるのか。もし出来なければ、そのまま畜生に生まれ変わつてしまふということ。

又有商量、洞山示衆云、向時作麼生。奉時作麼生。功時作麼生。共功時作麼生。功功時作麼生。時有僧問、如何是向。山云、喫飯時作麼生。如何是奉。云、背時作麼生。如何是功。云、放下鉏頭時作麼生。如何是共功。云、不得色。如何是功功。云、不共。向時作麼生、謂、趣向此事。答曰、喫飯時作麼生、謂此事不可喫飯時、無功勲而有間斷也。奉時作麼生、奉乃承奉也。如人奉尊長、先致敬而後承奉。向乃功勲之所立。才向即有承奉之義。答曰、背時作麼生、謂此事無間斷。奉時既尔、而背時亦然。言背即奉之義。蓋奉背皆功勲也。功時作麼生、功即用也。答曰、放下鉏頭時作麼生、把鉏頭是用。放下鉏頭是無用。

洞山之意謂用與無用皆功勲也。亦是無間斷之義。共功時作麼生、謂法與境敵。答曰、不得色、乃法與境不得成一色。正用時、是顯箇無用底。無用即用也。若作一色、即是十成死語。洞山宗旨、語忌十成。故曰、不得色。乃活語也。功功時作麼生、謂法與境皆空。謂之無功用大解脫。故曰不共、乃無法可共。不共之義、全歸功勲邊。如法界事事無礙是也。你面前無我。我面前無你。所以夾山道、此間無老僧、目前無閻梨、是也。如此之說、皆趣向承奉、於日用四威儀內成就、世出世間、無不周旋。謂之功勲五位。

\*無||無有(指)。\*才||纔(統)(指)。\*尔||爾(統)(指)。

又商量する有り、「洞山衆に示して云く、『向の時作麼生。奉の時作麼生。功の時作麼生。共功の時作麼生。功功の時作麼生』。時に僧有りて問う、『如何なるか是れ向』。山云く、『飯を喫する時作麼生』。『如何なるか是れ奉』。云く、『背の時作麼生』。『如何なるか是れ功』。云く、『鉏頭を放下する時作麼生』。『如何なるか是れ共

功』云く、『色を得ず』。『如何なるか是れ功功』云く、『不共なり』。

「向の時作麼生」とは、此の事に趣向するを謂う。

答えて曰う、「飯を喫する時作麼生」とは、此の事、飯を喫すべからざる時、功勲なくして間斷有るを謂う。「奉の時作麼生」とは、奉は乃ち承奉なり。人の尊長に奉ずるが如し。先づ敬を致してしかる後に承奉す。向は乃ち功勲の立つ所なり。才チかに向えば即ち承奉の義有り。答えて曰う、「背の時作麼生」とは、此の事間斷無きを謂う。奉の時も既に爾り、背の時も亦た然り。背は即ち奉の義なるを言う。蓋し奉背、皆功勲なり。「功の時作麼生」とは、功は即ち用なり。答えて曰く、「鉏頭を放下する時作麼生」とは鉏頭を把るは是れ用なり。鉏頭を放下するは是れ用無きなり。洞山の意は用と無用と、皆功勲なることをいうなり。亦た是れ間斷無きの義なり。「共功の時作麼生」とは、法と境と敵すことをいう。答えて曰く、「色を得ず」とは、乃ち法と境と一色と成るを得ざるなり。正用の時、是れ箇の無用底を顯わす。無用即ち用なり。若し一色と成さば、即ち

是れ十成の死語。洞山の宗旨、語は十成を忌む。故に曰く、「色を得ず」と。乃ち活語なり。「功功の時作麼生」とは、法と境とは皆空なることを謂う。これを無功用の大解脱と謂う。故に不共と曰うは、乃ち法として共なるべき無し。不共の義は全て功勲邊に歸す。法界の事事無礙なるが如きは是なり。你在面前に我無く、我が面前に你無し。所以に夾山の「此間に老僧無く、目前に闍梨無し」と道うは是なり。此の如きの説、皆な趣向承奉して、日用四威儀の内において成就して、世出世間に周旋せざること無し。これを功勲の五位と謂う。

○洞山示衆云向時作麼生不共二洞山語録一(大正藏四七一五二五c)の功勲五位についての解説。功勲五位は、修行の進んでいく過程を向、奉、功、共功、功功の五段階に分類して説明した洞山の説。向は修行に入るにあたって、日常における工夫を最も尊ぶべきという位であり、奉は仏道修行に努め、更に向上を目指していくという位、功は修行の成果が現れはじめ、一切空を知り、平等無差別の境地を自覚した位、共功とは、その平等性にも留ま

らず、差別の境涯に入っていく位であり、功功とは、平等も差別も超越し、自然に仏法を尽くしていく位のことである。ここでの大慧の功勲五位に対する解説は、曹洞の宗旨に則った常識的なものであると思われる。

○十成Ⅱ完全になること。本文にもあるとおり、曹洞宗では十成を忌む。

○法界事事無礙Ⅱ華嚴の四法界の内の一つ。華嚴の四法界とは、①事法界、②理法界、③理事無礙法界、④事事無礙法界である。

○夾山道此間無老僧目前無闍梨Ⅱ夾山善会の章には見られない語であるが、『伝燈録』卷一六、樂普元安章に夾山の言葉として記録されている。

你道、他古人意、果如是乎。若只如此、有甚奇特。只是口傳心授底葛藤。既不如是、且古人意畢竟作麼生。妙喜為你下箇注脚、也要諸方檢點。不見汾陽道、面目見在、一任揀取。故浄名云、但除其病而不除法。又首楞嚴云、汝以緣心聽法。此法亦緣。古人一言半句、雖是垂慈、皆在未嗣已前著到。如三玄三要、四種料揀、十智同真、亦是遮箇道理。妙喜恁麼説、不是貶剥諸方。且要箇中人辨明縑素而已。

\*檢點Ⅱ點檢(指)。\*説Ⅱ道(指)。

你道え、他の古人の意、果たして是くの如くなるかを。若し只だ是くの如んば、甚の奇特かあらん。只だ是れ口傳心授底の葛藤なり。既に是の如くならざれば、且つ古人の意は、畢竟作麼生。妙喜、あなたが為に箇の注脚を下し、也た諸方の檢點を要す。見ずや、汾陽の道く、「面目見在、揀取に一任す」。故に浄名云く、「但だその病を除いて法を除かず」。又首楞嚴に云く、「汝、緣心を以て法を聴く。此の法亦緣なり」。古人の一言半句、是れ慈を垂ると雖も、皆未だ嗣せざる已前に在って著到す。三玄三要、四種の料揀、十智同真の如きは、亦た是れ遮箇の道理なり。妙喜恁麼に説くは、是れ諸方を貶剥するにあらず。且く箇中の人の、縑素を辨明せんと要するのみ。

○口伝心授底葛藤Ⅱ言葉を通して仏法の真髓を伝えること。禅では「不立文字、教外別伝」を標榜する宗旨であるから、当然このような禅風を認めない。

○汾陽道面目見在一任揀取。『面目見在』という言葉は『汾

陽無德禪師語録』に「十智同真」を説く部分に見られる。

後半の「一任揀取」は不明。「作麼生是十智同真。與上座  
點出一同一質。二同大事。三總同參。四同真志。五同  
遍普。六同具足。七同得失。八同生殺。九同音吼。十同  
得入。又云。與什麼人同得入。與誰同音吼。作麼生是同  
生殺。什麼物同得失。阿那箇同具足。是什麼同遍普。何  
人同真志。孰能總同參。那箇同大事。何物同一質。有點  
得出底麼。點得出者。不吝慈悲。點不出來。未有參學眼  
在。切須辨取。要識是非。面目見在。不可久立」(大正藏  
四八一三〇四c)。

○故浄名云但除其病而不除法。『維摩經』(大正藏一四一五  
四五a)にあり。

○又首楞嚴云汝以緣心聽法此法亦緣。『首楞嚴經』(大正藏  
一九一九四五a)にあり。

○未嗣已然前。學者が一句を吐き出す前に。

○三玄三要。既出。

○四種料揀。臨濟義玄が為人の施設として創設したものを  
基本として、後世、風穴延沼(八九六一九七三)の語録  
に初めて「四料揀」として記録される。料は理量、揀は  
折斷、分別してえらぶことで、「人」と「境」とを四種に  
わけて、師家が修行者に接する立場を四つに分類してい

る。

「師晚參示衆云。有時奪人不奪境。有時奪境不奪人。有時  
人境俱奪。有時人境俱不奪。時有僧問。如何是奪人不奪  
境。師云。煦日發生鋪地錦。瓔孩垂髮白如糸。僧云。如  
何是奪境不奪人。師云。王令已行天下遍。將軍塞外絕烟  
塵。僧云。如何是人境兩俱奪。師云。並汾絕信独処一方。  
僧云。如何是人境俱不奪。師云。王登宝殿野老謳歌。臨  
濟録。大正藏四七一四九七a)」。

○十智同真。汾陽善昭が示した、宗師家として具えるべき  
十種の智。この十智なしでは邪正を弁ずることも、縉素  
を分かつことも、人天の眼目になつて是非を決断するこ  
とも出来ないものである。原文既出。

○貶剥。けなしてその力や価値を奪うこと。退ける。おさ  
える。

又有一種也。不在言語上、也不在古人公案上、也不在心  
性上、也不在玄妙上、也不在有無得失邊。如火相似、觸  
著便燒。非離真而立處、立處即真。信手拈來、超今越古。  
一句來一句去、末後多一句、便是得便宜。似遮般底、只  
是弄箇業識癡團。便謂無因果無報應。亦無人、亦無佛、  
飲酒食肉、不礙菩提。行盜行姪、無妨般若。如此之流、

正是師子身中蟲、自食師子身中肉。永嘉所謂、豁達空、撥因果、莽莽蕩蕩招殃禍、是也。

\* 按 Ⅱ 案（指）。

又一種有り、言語上に在らず、也た古人の公按上にも在らず、也た心性上にも在らず、也た玄妙上にも在らず、也た有無得失邊にも在らず。火の如くに相似て、觸著すれば便ち焼く。眞を離れて立處なるに非ず、立處即ち眞なり。手に信せ、拈じ來つて、今を超え古を越ゆ。一句來たり、一句去り、末後に一句多くして、便ち是れ便宜を得たり。遮般の似き底、只だ是れ箇の業識を弄する癡團なるのみ。便ち謂う、「因果無く報應無し。亦た人無く、亦佛無し。飲酒食肉、菩提を礙げず。盜を行じ、姪を行ずること、般若を妨ぐることに無し」と。此の如きの流、正に是れ師子身中の蟲なり。自ら師子身中の肉を食らう。永嘉の所謂る、「豁達の空、因果を撥い、莽莽蕩蕩として殃禍を招く」是れなり。

○非離真而立處、立處即真。Ⅱ僧肇（？—四一四）の『肇

論』「不真空論第二」中の語。「不動真際為諸法立處、非離真而離立處、立處即真也」（大正藏四五—一五三a）。この語は『馬祖録』にも使われており、後に『臨濟録』に至つて、「隨處に主と作らば、立處皆な真なり」という有名な語の元となる。「立處即真」は現実の絶対肯定の立場。

○信手拈來超今越古一句來一句去Ⅱ自由自在なるさま。

○得便宜Ⅱ好機を得ること。好都合なこと。「落便宜」と一緒に使われる格言。

○弄箇業識痴團Ⅱ業識を無限に生じさせて、思量分別をたくましくすること。

○師子身中虫Ⅱ佛弟子でありながら、かえつて佛法を謗り、佛法を滅する者のこと。また内から生じる災いのたとえ。

○永嘉所謂豁達空撥因果莽莽蕩蕩招殃禍Ⅱ『證道歌』の言葉（大正藏四八—三九六a）。

有一種、商量古人公按、謂之針線工夫。又謂之郎君子弟禪。如商量女子出定話云、文殊是七佛之師、為甚麼出女子定不得。云、文殊與女子無緣。罔明是初地菩薩。為甚麼出得女子定。云、與女子有緣。下語云、冤有頭、債有主。又有商量道、文殊不合有心、所以出不得。罔明無意。

所以出得。下語云、有心用處、還應錯、無意求時却宛然。又有商量道、文殊為甚麼出女子定不得。杓柄在女子手裏。罔明為甚麼出得。如蟲禦木。又云、因風吹火。又云、争奈女子、何。邪解甚者至於作入定勢、又作出定勢、推一推、彈指一下、哭蒼天數聲。伏惟尚饗拂袖之類、冷地看来慙惶殺人。

\* 按 || 案(指)。\* 工夫 || 功夫(指)。\* 話 || 語(統)(指)。  
\* 有 || なし(指)。\* 應 || 成(指)。\* 慙 || 慚(指)。

一種有り、古人の公按を商量し、これを針線の工夫と謂い、又これを郎君子弟の禪と謂う。如えば女子出定の話を商量して云う、「文殊は是れ七佛の師なるに、甚麼と為てか女子を定より出だすこと得ざる」。云く、「文殊と女子とは縁無し」。「罔明は是れ初地の菩薩なるに、甚麼と為てか女子を定より出だすこと得たる」。云く、「女子と縁有り」。下語して云く、「冤に頭有り、債に主有り」。又商量して道う有り、「文殊不合にして、心有り。所以に出すこと得ず。罔明意無し。所以に出し得たり」。下語して云く、「心に用處有れば、還つて

應に錯るべし。意の求むること無き時、却つて宛然たり」。又商量有りて道う、「文殊、甚麼と為てか女子を定より出すことを得ざる。杓柄、女子の手裏に在り。

罔明は甚麼と為てか出し得たる。蟲の木を禦むが如し。又云く、「風に因つて火を吹く」。又云く、「女子を争奈何せん。邪解甚しきは入定の勢いを作し、又出定の勢を作し、推一推し、彈指すること一下、蒼天と哭すること數聲。伏して惟みるに、尚わくば饗<sup>は</sup>けよ」といい、拂袖の類に至つては、冷地に看來たれば慙惶殺人なり。

○ 謂之針線工夫又謂之郎君子弟禪 || 「針線工夫」とは、「針仕事」「刺繡」のこと。つまり奥さまお嬢さまのお仕事。「郎君子」とはそれに対する、おぼっちゃま、若さま、ということ。お嬢さまや若さまのするような非常に甘い禪風のこと。

○ 女子出定話 || 本来は『諸仏要集經』から出たもの。「伝燈錄」卷二七、『無門関』四二則に見える。ここでは『正法眼藏』から引用する。「世尊昔因文殊至諸仏集処、值諸仏各還本处。唯有一女人、近彼仏坐、入於三昧。文殊乃白仏云、何此女得近仏坐而我不得。仏告文殊、汝但覺此女

令従三昧起。汝自問之。文殊遶女人三匝、嗚指一下乃托。至梵天尽其神力、而不能出。世尊云、仮使百千文殊、亦出此女人定不得。下方過四十二恒河沙国土、有網明菩薩、能出此女人定。須臾網明大士從地湧出、作礼世尊。世尊勅網明出。網明卻至女人前、嗚指一下、女人於是從定而出。(統藏經一一八一—二二三b)。

○文殊不含有心〓〓不含有、は「そうあるべきでないのに」。

○冤有頭債有主〓〓物事を処理する時は、必ず責任者がその責を負うべきことの喩え。

○因風吹火〓〓火を吹きおこすの風の方向に従っていれば容易であるように、学人の機根の向かう所を察してそれに相応した手段を以て教導することにたとえる。また好機をとらえて事を運ぶこと。

○尚饒〓〓こいねがわくはうけよ。祭文の末に用いる語。これが転じてここで挙げるような連中は死ぬしかないという意味。

○払袖〓〓袖をうちほらう。決然として立ち去るときの氣勢。

○冷地看来慙惶殺人〓〓冷静に見てみれば、まことに恥ずかしいかぎりだ。「殺人」とは極言する言い方。

又芭蕉云、你有拄杖子、我與你拄杖子。你無拄杖子、我奪却你拄杖子。商量云、你若遮般人、我與你說遮般話。

謂之與你拄杖子。你不是遮般人、我當面換却你眼睛。謂之奪却你拄杖子。下語云、量才補職。又云、看樓打樓。又有商量道。有無與奪、是擒縱。學者似恁見解、如麻似粟。

\*却〓〓無し(普)。

又芭蕉云く、「你拄杖子有らば、我你に拄杖子を與えん。你拄杖子無ければ、我你的拄杖子を奪却せん。商量して云く、「你若し是れ遮般の人ならば、我あなたがために遮般の話を説かん。これを『你に拄杖子を與う』と謂う。你是れ遮般の人にあらざれば、我當面にあなたが眼睛を換却す。これを『拄杖子を奪却す』と謂う。下語して云く、「才を量つて職に補す」。又云く、「樓を看て樓を打つ」。又商量して道う有り。「有無與奪、是れ學者を擒縱す」。恁の似き見解、麻の如く粟に似たり。

○芭蕉云く奪却你拄杖子〓〓大慧在世中の語録には見られない言葉であるが、『五燈会元』卷九芭蕉慧清(生没年不詳)章に見える。又『無門関』四四則に同じ公案が載る。大

慧はこのような有には与え、無には奪うという矛盾を要求する公案を好んで使った。同種の公案に「首山竹篋」の公案がある。芭蕉慧清（生没年不詳）は偽仰宗。南榕光涌の法嗣。

○量才補職ニ欠員が出れば、才能に応じて職を与える。

○看樓打樓ニ相手の出方を見てこちらの出方を決めること。

○如麻似粟ニ数のいたずらに多いこと。

如上所説、皆口傳心授、露布葛藤。印板上打来、模子裏脱出。非唯\*自謗、亦乃謗他古人。此是諸方學得底海蠱兒禪。諸上座、還信得及麼。不見道、垂慈則有法、無法、不垂慈。識取鉤頭意、莫認定盤星。我遮裏是海蚌禪。開口便見心肝五臟、差珍異寶、都在面前。閉却口時、何處覓伊縫罅。不是強為。法本如是。諸上座、光陰可惜。各各趣色力強健、猛著精神了取。

\*唯ニ惟（指）。

如上の所説、皆な口傳心授、露布葛藤なり。印板上に打ち來たり、模子の裏より脱出す。唯だ自ら謗るのみに非ず、亦た乃ち他の古人を謗る。此れは是れ諸方

學得底の海蠱兒禪なり。諸上座よ、還た信得及すや。

道うを見ずや、慈を垂れば則ち法有り、法無ければ、慈を垂れず。鉤頭の意を識取して、定盤星を認むる莫れ。我が遮裏は是れ海蚌禪。口を開けば便ち心肝五臟を見て、差珍異寶、都て面前に在り。口を閉却する時、何處にか伊が縫罅を覚めん。是れ強為しひなすにあらす。法本と是の如し。諸上座よ、光陰惜しむべし、各各色力の強健を趣い、精神を猛著して了取せよ。

○露布葛藤ニ「露布」は、広く公衆の目に触れさせるために封をしない告知書のことであるが、それが転じて文字のこと。「露布葛藤」とは、文字言説による説明のこと。  
○模子裏ニ手本。ひながた。「裏」は、「くの内、くの中」という意味。

○垂慈則有法無法不垂慈ニ慈悲をもって指導をすれば、それは法があるということであるし、法が無ければ慈悲を施すことなど出来ない。

○識取鉤頭意、莫認定盤星ニ「鉤頭意」とは、学人を指導するための言葉。「定盤星」とは竿秤で量る時、物をのせた盤が分銅とつり合う点の目盛りのこと。これも同じく

言葉の意味。先人の言葉に執着して、物事の本質を見誤つてはならないという意味。

○海蚌禪ニはまぐり禪。宗師家の全てが露呈されている禪風のこと。大慧は自身の禪風をこのように位置づけ、密室伝授を退けている。

○差珍異宝ニ珍しい宝物。この場合の「差」は「かわった、怪異な」という意味。この「差」と同じ意味の例として「差事」がある。「看來看去、忽然睡覺、不是差事」(『大慧書』大正蔵四七―九三五b)。

○縫罽ニ珠の瑕。

○各各趣色力強健、猛著精神了取ニ各々自分の身体の元氣なうちに奮起して如上の道理を自分自身でさとするべきである。

莫愛佗奇特。奇特處、賺悞人、雜毒在心識裏。佗時後日、莫道得力。只死時、也死得不瞥脫。更說甚麼、敵佗生死世間。無明煩惱、却有限量。一念識破、則當體寂滅。惡知惡見、法塵煩惱無限量、能障道眼、使得你心識晝夜不停、謗佛法僧、造地獄業。雖是善因、返招惡果。果有智慧大丈夫漢、方識得破、不被他作惱。不見雲門大師有言、盡乾坤一時將來、著你眼睫上。你諸人聞恁麼道、不敢望

你出来、性燥把老僧打一擱。且緩緩、子細看是有是無、是箇甚麼道理。直饒你向遮裏明得、若向衲僧門下、好椎脚折。若是箇人、聞說道甚麼處有老宿出世、便好裏面唾汚我耳目。你若不是箇手脚、纔聞人舉、便承當得、早落第二機也。

佗の奇特を愛すること莫れ。奇特の處、人を賺悞し、雜毒心識の裏に在り。佗時後日、力を得たるとう道うこと莫れ。只だ死する時、也た死に得て瞥脫せず。更に甚麼を説いてか、佗の生死世間に敵せん。無明煩惱、却つて限量有り。一念に識破すれば、則ち當體寂滅す。惡知惡見、法塵煩惱、限量無く、能く道眼を障ぐ。あなたが心識をして、晝夜停まらず、佛法僧を謗り、地獄の業を造らしむ。是れ善因なりと雖も、返つて惡果を招く。果して有智慧の大丈夫の漢にして、方めて識得破し、他の作惱を被らず。見ずや、雲門大師言う有り。「盡乾坤一時に將ち來つて、あなたが眼睫の上に著かん。你諸人恁麼に道うを聞くも、敢えて你出で來つて、性燥に老僧を把らえて打つこと一擱することを望まず。且く

緩緩たれ。子細に看よ。是れ有か、是れ無か、是れ箇の甚麼の道理なるかを。直饒い你速裏に明らかめ得るも、若し衲僧門下に向かえば、脚を推し折るに好し。若し是れ箇の人ならば、甚麼の處にか老宿の出世有りと道を聞説かば、便ち好く薫面に我耳目を唾汚す。你若し是れ箇の手脚にあらずんば、纔かに人の擧するを聞いて、便ち承當し得るも、早に第二機に落ちたり」。

○ 賺悞Ⅱ だますこと。

○ 警脱Ⅱ 速やかに悟り去ること。この表現は否定的な意味。合いで使われることが多いが、ここでは肯定的な意味。

○ 雲門大師有言、盡乾坤一時將來、早落第二機也。Ⅱ『雲門広録』(大正蔵四七―五四七a) にあり。

又不見羅山和尚有言、玄門無法、不立紀綱。若欲討尋、聲前看取。諸佛子、真心無定、真智無邊。我若縱遮兩片皮、從今日說、到盡未來際、鉤鎖連環、相續不斷。亦不借佗人氣力。此是人人分上各自具足底事。添些子不得、減些子不得。佛祖得之、喚作大解脫法門、衆生失之、喚作塵勞煩惱。然得亦不曾得、失亦不曾失。得失在人、不

在法。故祖師云、至道無難、唯嫌揀扱。但莫憎愛、洞然明白。毫釐<sup>\*</sup>有差、天地懸隔。欲得見前、莫存順逆。你禪和家、箇箇念得、還曾略著意理會麼。祖師安箇名字、謂之信心銘。只要諸人信此廣大寂滅妙心、決定不從人得。故中間有言、一心不生、萬法無咎。無咎無法、不生不心。能隨境滅、境逐能沈。境由能境、能由境能。又云、大道體寬、無易無難。又云、執之失度、必入邪路。放之自然、體無去住。你但信、此一心之法、不可取、不可捨。便好向遮裏放身命。若放不得、是你根性遲鈍。臘月三十日、不要錯怪老漢。時熱、久立。喝一喝、下座。

\* 唯Ⅱ 惟(指)。\* 釐Ⅱ 釐(統)(普)。

又見ずや、羅山和尚言う有り、「玄門に法無く、紀綱を立てず。若し討尋せんと欲すれば、聲前に看取せよ」。諸佛子、真心無定、真智無邊なり。我若し遮の兩片皮を縦いままにすれば、今日より説いて盡未來際に到れども、鉤鎖連環し、相續断ぜず。亦た佗人の氣力を借らず。此は是れ人人分上各自具足底の事なり。些子を添うこと得ず、些子を減ずること得ず。佛祖これを得

て、喚んで大解脱の法門と作し、衆生これを失いて、喚んで塵勞煩惱と作す。然るに得れども亦た曾て得ず、失えども亦た曾て失わず。得失は人に在り、法には在らず。故に祖師云く、「至道無難、唯だ揀擇を嫌う。但

だ憎愛莫ければ、洞然として明白なり。毫釐も差有れば、天地懸隔す。見前せんと欲得すれば、順逆を存すること莫れ。你禪和家、箇箇に念得して、還た曾て略意を著けて理會するや。祖師箇の名字を安じて、これを『信心銘』と謂う。只だ要す、諸人此の廣大寂滅の妙心、決定して人より得ざると信ぜんことを。故に中間に言う有り、「一心生ぜざれば、萬法咎無し。咎無ければ法無し、生ぜざれば心ならず。能は境に隨つて滅し、境は能を逐つて沈む、境は能に由つて境たり、能は境に由つて能たり」。又云く、「大道は體寛く、易無く難無し」。又云く、「これを執して度を失すれば、必ず邪路に入る。これを放ちて自然ならば、體に去住無し」。

你但だ信ぜよ。此の一心の法は取るべからず、捨つるべからず。便ち遮裏に向かつて身命を放つに好し。

若し放つこと得ざれば、是れあなたが根性遲鈍なり。膺月三十日、錯つて老漢を怪しむことを要せざれ。時熱し久立す。喝一喝して、下座す。

○羅山和尚有言、玄門無法、不立紀綱。若欲討尋、聲前看取二引用不詳。ただ、密菴咸傑の法嗣である破菴祖先の言として、『続刊古尊宿語要』に見られる(続藏經一一九—一五五a)。羅山道閑(生没年不詳)は青原下。巖頭全豁の法嗣。

○兩片皮二上唇と下唇。いくら他人が言つてやつてもきりがない、ということ。

○鉤鎖連環二鉤がひっかかりあつて鎖のように連なつていくこと。

○得失在人、不在法二『宗鏡録』に「得失在人。法無邪正」(大正藏四八一八二七c)とある。

○故祖師云、至道無難、唯嫌揀擇。但莫憎愛、洞然明白。毫釐有差、天地懸隔。欲得見前、莫存順逆二『信心銘』(大正藏四八一三七六b)。

○一心不生、萬法無咎。無咎無法、不生不心。能隨境滅、境逐能沈。境由能境、能由境能。二『同右』(大正藏四八一三七六c)。

○大道體寛、無易無難。 〓同右。

○執之失度、必入邪路。放之自然、體無去住。 〓同右。

○時熱久立 〓上堂の時、大衆は直立して聞くので、説法の終わりに挨拶として用いる。暑い時に長い間ごころうであつた。

\*前回の『開元寺版普説』ならびに『指月録』所収分との対校を載せる。なお、頁数と行数は前回の『禅学研究』のものである。

(二一九―上 一) 妙喜 〓師(普)、無し(指)

(同 右―上 四) 龜 〓粗(指)

(同 右―上 六) 用 〓智(指)

(同 右―上 八) 實悟實證 〓實證實悟(指)

(同 右―上 九) 自悟自證 〓實證實悟(指) 無悟證 〓無證實悟(指)

(二二〇―下 一八) 紹繼 〓繼紹(指)

(同 右―下 二九) 做 〓作(指)

(二二一―上 一) 啐 〓碎(統)、碎(指)、卒(普)

剥 〓曝(統)(指)

(同 右―上 八) 唯 〓惟(指)

(二二三―上 一〇) 闇 〓暗(指)

(二二四―下 一九) 不信 〓不悟(指)

(二二六―上 二四) 怜 〓憐(統)(普)(指)

(同 右―上 二六) 認 〓纒(統)(指)

(同 右―上 二八) 見 〓現(指)

(二二七―下 二四) 即 〓打(指)

(二二八―上 二) 見箇 〓你見箇(普)(指) 甚麼 〓什麼(指) 托 〓拓(指) 吾 〓我(指)

\*なお、前回『禅学研究』発刊後、中国語の専門家である衣川賢次氏より書き下しのご指摘を受けたので、以下一部載せたいと思う。浅学の身である筆者には誠に幸甚であり、衣川先生に厚くお礼申し上げます。

(二九八― 一三) 師は閱の諸方の学者が黙照に困ずる

に 〓師は諸方の学者の黙照に困ずるをあはれみ

(二〇二― 一〇) 反あつて邪と為るに至る 〓正、

反つて：

(同 右一 一七) 癡禪自ら||癡禪自ら謙き

(同 右一 五) 参学する者をう。即ち法界無辺||参学する者に貽る。即たとい法界無辺：

(同 右一 九) 大正蔵四七—九四b || 大正蔵四七—九四一b

(二二九—下一五) 便たとち||便たとい

(二二一—上九、一四、一七、下一七、二二二—上五) 晴||

(同 右—上 四) 差排することを著せず||差排もちを著もちいず

(二二一—下 一) 遮箇の你に儘す伎倆||遮箇は你的伎倆を儘すも

(二二五—下 三) 「即心即佛」。若し||「即心即佛」。你若し

(二二六—上二四、二二六—下一七) 已||已

(二二六—下 七) 你在境界と為して：故に||你在境界、

…為の故に

(同 右—下 八) 許多有るが故なり||許多有る故に非

ず

(同 右—下 八) 我恁麼ならず||我却つて恁麼ならず

(同 右—下一三) 云う||言う

(二二九—上一七) 你希望して成ることを得んとすれど

も||你希望し得て成るとも